

ニホンザリガニの博物学的知見VIII —江戸時代の浮世絵に描かれたニホンザリガニ—

Knowledge of the natural history of the Japanese freshwater crayfish, *Cambaroides japonicus*, in Japan—VIII: Information from Ukiyo-e, “pictures of the floating world” during the late Edo period

芦刈治将¹・川井唯史²

Harumasa Ashikari and Tadashi Kawai

はじめに

ニホンザリガニ *Cambaroides japonicus* (De Haan, 1841) は、体長は5~6 cmが一般的で、成長しても7 cm程度にしかならず、北海道全域、青森県の広い範囲、秋田県・岩手県の北部に限産する国内、で唯一の日本固有であり、水温が低い河川の源流部や山上のカルデラ湖が主な生息地になっている (Kawai & Fitzpatrick, 2004; Kawai T & Labay, 2011)。現在、本種の生息数、生息地ともに減少しており、環境省第4次レッドリスト (2012) で絶滅危惧II類 (VU) に選定されている。また、秋田県大館市の生息地は日本における生息の南限に当たるため、その一部区域がニホンザリガニ生息地として1934年に国の天然記念物に指定されている。

これまでニホンザリガニの博物学知見は数多く報告されており (例えば、田中・川井, 2015)、本種は江戸時代から昭和時代初期にかけて肺病等の薬と

して盛んに利用されていた (山口, 1993; Yamaguchi & Holthuis, 2001)。ニホンザリガニの胃の中には脱皮に乳白色の結石が形成される。これは、江戸時代当時にオクリカンキリと呼ばれ、主成分が炭酸カルシウムで薬として利用され高価な価格で輸出もされていた (Kawai & Fitzpatrick, 2004)。

本報告では江戸時代の浮世絵師として世界的に有名な葛飾北斎がニホンザリガニをモチーフとして描いていた情報について初めて紹介し、その他に得られた本種の博物学的な情報も加えた。

材料と方法

2015年にすみだ北斎美術館所蔵の絵手本『伝手開手 北斎漫画』八編 (資料番号SHH0017) を調査した。また、すみだ水族館所蔵の史料、『日本水産動植物図集』、大日本水産会/編、大日本水産会、1932年 (昭和7年) 刊行も調べた。

結果と考察

葛飾北斎 (1760~1849) は、江戸時代後期の浮世絵師として、その名を知られており「富嶽三十六景」や『北斎漫画』などと言った代表作がある。その魅力的な生涯や、約70年にもわたって描き続けられた多彩な作品が、高い評価を得て、世界の偉大な芸術家として広く知られている (永田, 1995)。

¹ すみだ水族館

〒131-0045 東京都墨田区押上1-1-2
Sumida Aquarium, 1-1-2 Oshiage, Sumida, Tokyo 131-0045, Japan
E-mail: Harumasa_ashikari@orix-aqua.co.jp

² 稚内水産試験場

〒097-0001 稚内市末広4-5-15
Wakkanai Fisheries Research Institute, 4-5-15 Suchiro, Wakkanai, Hokkaido 097-0001, Japan
E-mail: kawai-tadashi@hro.or.jp

北斎と言えば「富嶽三十六景」というイメージが非常に強いが、他にも各地の橋梁をテーマとした「諸国名橋奇覧」、四季折々の草花や鳥、昆虫などを主題とした「花鳥画」諸国の名瀑を題材にした「諸国瀧廻り」などの代表作もあり、その一つとして『北斎漫画』(図1)がある(永田, 1995)。

『北斎漫画』とは、1814年に森羅万象を対象とし動植物などもスケッチした絵手本と呼ばれ、当初は1編で完結の予定であったが、多くが売られたようで北斎の死後にも続編が作られ、最終的には十五編が出版された「富嶽三十六景」に次ぐ北斎の代表作

として名高い作品である(永田, 1995)。当時、多く居た門人への教科書、自らの画風を普及するもの、そして様々な職人たちの図案集としての性格を持つものとされ、絵の教科書の一つとなっていた(永田, 1995)。本史料は通常描かれることのない、江戸庶民の身近にあったであろうものが数多く描かれており、風俗百科とも称され、北斎が思いのまま、気の向くままに筆を走らせた作品とされている(葛飾, 2010)。また、鑑賞性の高い画集でありながら、数多くの北斎の機知が見られる点もこの作品の魅力とされ、収録画のいくつかは、シーボルトの大著である『日本』にも示され(永田, 1995)、当時から国外での北斎の評価が高かった事を示している。『北斎漫画』の始まりは、北斎が関西旅行の途中に名古屋の門人宅に滞在していた時に描いた300余りの下絵をもとに初編としてまとめられたものであり、この年(1814年)に刊行された。収録された図版は、4000点以上にも及ぶと言われている(葛飾, 2011a, 2011b)。

『北斎漫画』の八編二十一丁裏にニホンザリガニが収められている。同丁に北海道に分布することを

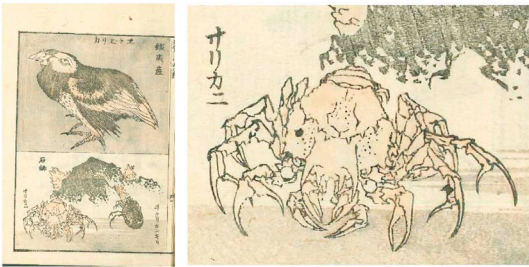


図1. 『伝神開手 北斎漫画』八編 (画像提供墨田区)。

第五十八圖版

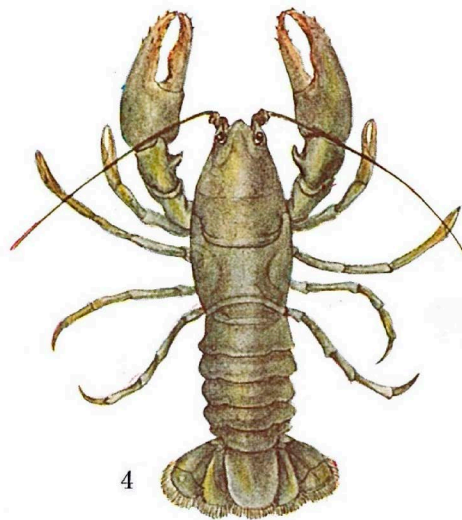


図2. 『日本水産動植物図集下編』(第五十八圖版第四圖)。

示す「蝦夷産、エトピリカ」が描かれていることから、ザリガニの分布域が北海道であるという認識は葛飾北斎にあったものと推察される。しかし、ザリガニの画像情報に関しては、カニ類の様相を呈している(図1)。葛飾北斎がニホンザリガニの分布域に行き本種を観察したことを示す記録は無いので、北斎はニホンザリガニをカニの一種として想像で描いたと思われる。さらに海水性のカメノテが同丁に描写されていることから、北斎はニホンザリガニを海水性の生き物と誤認していたことも示唆される(中坪, 2016)。ニホンザリガニの同丁に、「オクリカンキリ」と書かれている(図1)が、オクリカンキリとは先述の通りニホンザリガニが脱皮する時期に体内に形成される直径数ミリの乳白色の結石で(Kawai & Fitzpatrick, 2004)、薬用とされていた(Yamaguchi & Hothuis, 2001)。また『北斎漫画』は江戸庶民の風俗百科の意図もあったので(永田, 1995; 2005) これらを考え合わせると、ニホンザリガニの胃石を薬として利用することは当時の江戸の人々に広く知られていた可能性がある。

1932年(昭和7年)に大日本水産会により出版された『日本水産動植物図集下編』(第五十八圖版第四圖)に、ニホンザリガニが掲載され、彩色された図の添付もある(図2)。そこには、ニホンザリガニの解説として、「頭胸部背甲はやや圓柱状にして、三角形の額角は第一觸角柄よりも長く第二觸角柄第二節の基部を超ゆ。第一の大鉗脚の掌部には内縁に近く浅き溝あり、尾節は尾脚よりも短きことなし。褐色又は緑色を帯ぶ。北海道及び青森縣の湖沼河川に産す」と記されている。甲殻類は死亡すると急速に体色が失われるが、この図版は彩色されており、良く生体時の体色である暗褐色(Kawai & Fitzpatrick, 2004)を良く表現している。昭和初期は、カラー写真が普及していなかったと考えられ、生物を正確に描ける絵画家自身が、ニホンザリガニが生息する北日本に行くことは考え難い。そのため本図は、生きた個体を東京まで運んで描いた可能性が高い。

大日本水産会は、水産業の振興をはかり、経済的、文化的発展を期することを目的として明治15年(1882年)に設立された水産業の総合団体である(一般社団法人日本水産会, 2016)。この団体

がこの図集にニホンザリガニを掲載したということは、当時ニホンザリガニが水産物として流通していたことを示唆している。また、この図集が出版された翌年の昭和8年12月には、東京中央卸売市場竣工した年でもあり、より活発な水産物の取引が始まったと思われる。さらにこの頃、日本では、養殖業が盛んになってきており、特に琵琶湖のアユを全国の河川に放流する試みが行われるようになり、1930年代、日本国有鉄道(国鉄)は生きた魚を輸送する専用の貨車を持つといった、生鮮食品の輸送が急速に発展した時代背景があった。これのことを考え合わせると、本史料は、ニホンザリガニを昭和初期当時、水産物としての位置づけで、北海道から生きたまま運んだことを示唆すると考えられる。これまでのニホンザリガニの利用は、江戸時代は本種の胃石を薬として用いること、明治時代以降は北海道と東北での生息地での利用が中心であり、例外的に皇族方が生きたニホンザリガニを関東に運び晚餐料理の食材としたことはあった(川井, 2006)。しかし、水産物として生きた個体を北日本から東京まで運んだ事を示唆した史料を紹介したのは本稿が初めてである。

謝 辞

本稿を作成するにあたり所蔵する史料をご提供いただいた、すみだ北斎美術館、に深謝します。また英文を校閲して頂いたAust Aquatic Biological P/LのRob McCormack氏に感謝します。

文 献

- De Haan, W., 1841. Crustacea. In: Ph. F. von Siebold (1833–1850), *Fauna japonica sive descriptio animalium, quae in itinere per Japoniam, jussu et auspiciis superiorum, qui summum in India Batava Imperium tenent, suscepto, annis 1820–1830 collegit, notis, observationibus et adumbrationibus illustravit* (Crustacea): i–xviii, i–xxxix, ix–xvi, 1–243, pls. A–J, L–O, 1–55, circ. Tab. 2.
一般社団法人日本水産会 <http://www.suisankai.or.jp/daisui/daisui.html> (2016年12月21日ダウンロード)
川井唯史, 2006. ニホンザリガニと人間の関係—皇室との係わりおよびスミソニアン自然史博物館における調査報告—. *生物科学*, 57: 106–109.
Kawai, T., & Fitzpatrick, Jr., J. F., 2004. Redescription of

- Cambaroides japonicus* (De Haan, 1841) (Crustacea: Decapoda: Cambaridae) with allocation of type locality and month of collection of types. *Proceedings of the Biological Society of Washington*, 117: 23–34.
- Kawai, T., & Labay, V. S., 2011. Supplemental information on the taxonomy, synonymy, and distribution of *Cambaroides japonicus* (De Haan, 1841) (Decapoda: cambaridae). *New Frontiers in Crustacean Biology, Proceedings of the TCS Summer meeting, Tokyo*, 20–24 September 2009, *Crustaceana Monographs*, 15: 275–284.
- 葛飾北斎, 2010. 江戸百態 (北斎漫画 (1)). 青幻舎, 京都, 348 pp.
- 葛飾北斎, 2011a. 森羅万象 (北斎漫画 (2)). 青幻舎, 京都, 348 pp.
- 葛飾北斎, 2011b. 奇想天外 (北斎漫画 (3)). 青幻舎, 京都, 349 pp.
- 永田生慈 (財団法人墨田区文化振興財団編), 1995. 葛飾北斎: すみだが生んだ世界の画人. 財団法人墨田区文化振興財団, 東京, 72 pp.
- 永田生慈, 2005. もっと知りたい葛飾北斎 生涯と作品. 東京美術, 東京, 79 pp.
- 中坪俊之 (墨田区文化振興財団・葛飾北斎美術館編), 2016. 北斎と水の生き物—『北斎漫画』に描かれた生き物たち. 北斎研究 (墨田区文化振興財団・葛飾北斎美術館研究誌), 東京美術, 東京, 67 pp.
- 田中一典・川井唯史, 2015. ニホンザリガニの博物学知見VII—江戸時代後期から昭和初期の史料から得られた情報—. *Cancer*, 24: 29–37.
- 山口隆男編, 1993. シーボルトと日本の博物学甲殻類. 日本甲殻類学会, 東京, 73 pp.
- Yamaguchi, T., & Holthuis, L. B., 2001. Kai-ka Rui Siyasin, a collection of pictures of crabs and shrimps, donated by Kurimoto Suiken to Ph. Von Siebold. *Calanus, Special Number III*: 1–156.